



富安博隆

東京大学大学院 農学生命科学研究科獣医学専攻 獣医内科学教室 准教授

# Recommend

富安博隆 先生が薦める、この5冊

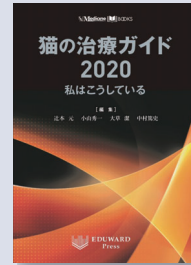


SAI Medicine BOOKS

### 犬の治療ガイド2020

私はこうしている

編集：辻本 元、小山 秀一、大草 潔、中村 篤史  
A4判 上製 ビニールカバー付き 1264頁  
定価：44,000円(税込)



SAI Medicine BOOKS

### 猫の治療ガイド2020

私はこうしている

編集：辻本 元、小山 秀一、大草 潔、中村 篤史  
A4判 上製 ビニールカバー付き 1008頁  
定価：38,500円(税込)



VETERINARY BOARD

11号  
(2020年3月号)

富安先生ご執筆号

これだけは押さえておきたい  
抗がん薬治療による有害事象への対応(前編)  
臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジン  
月刊 A4判 96頁  
定価：4,400円(税込)



VETERINARY BOARD

12号  
(2020年4月号)

富安先生ご執筆号

これだけは押さえておきたい  
抗がん薬治療による有害事象への対応(後編)  
臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジン  
月刊 A4判 96頁  
定価：4,400円(税込)



VETERINARY ONCOLOGY

小動物腫瘍科専門誌

VETERINARY ONCOLOGY

19号  
(2018年7月号)

腫瘍随伴症候群  
知る！ 診る！ 治す！ そして活かす！  
小動物腫瘍科専門誌 隔月刊 A4判 128頁  
定価：7,150円(税込)

●詳しくはEDUWARD Press オンライン「獣医療のミライ」特設ページ  
([https://eduard.online/lp\\_future\\_of\\_veterinary\\_medicine](https://eduard.online/lp_future_of_veterinary_medicine))をご確認ください。



富安博隆  
Hiroataka Tomiyasu

東京大学大学院 農学生命科学研究科獣医学専攻  
獣医内科学教室 准教授

### 経歴

- 2010年 東京大学農学部 獣医学専修 卒業
- 2014年 東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻 修了
- 2014~2015年 ミネソタ大学Veterinary Clinical Sciences, College of Veterinary Medicine 博士研究員
- 2015~2016年 東京大学大学院農学生命科学研究科 附属動物医療センター 特任研究員
- 2016~2018年 東京大学大学院農学生命科学研究科 附属動物医療センター 特任助教
- 2018~2021年 東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻 獣医内科学教室 助教
- 2021年~ 東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻 獣医内科学教室 准教授



EDUWARD Press

〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階  
tel. ☎ 0120-80-1906 fax. ☎ 0120-80-1872  
<https://eduard.online>

DM : 70001849

研究・臨床・教育の3つを常に最高水準で  
臨床の「分からない」が研究の出発点

研究・臨床・教育の3つを常に最高水準で  
臨床の「分からない」が研究の出発点

## 臨床、研究の道と、人との出会い

—まずは、先生が獣医師になろうとお考えになったきっかけからお聞かせください。

小学生の頃にはすでに、小動物の臨床獣医師になりたいと思っていたのは覚えているのですが、はっきりしたきっかけはないのかもしれない。友人の家の柴犬が大好きで、学校帰りによく会いに行っていた思い出があるぐらいかな？実際に臨床の現場に触れ始めたのは大学4年生になり獣医内科学教室に所属してからで、研修医の先生方の監督のもとで保定や検査のお手伝いなど、さまざまな経験をさせていただいたんです。実際の臨床の現場で学ぶことがすごく嬉しくて、しかも当時の東京大学の研修医や先輩の先生方は、中村篤史先生や福島建次郎先生、金本英之先生と、今や第一線で活躍されている方ばかり。優秀な方々に囲まれ、授業では学べないようなことを現場で沢山教わるのができたのは本当に幸運でした。

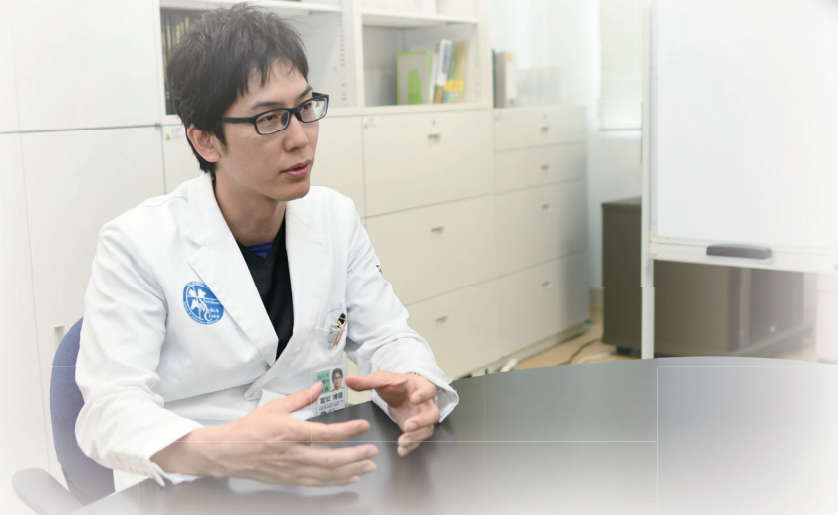
—腫瘍と血液の研究の道を選ばれたのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

学部生時代、一昨年退官された辻本 元先生から「卒業研究のテーマとして腫瘍をやってみませんか」というお話をいただいたのがスタートで、研究計画立案の基礎から丁寧に指導いただきました。腫瘍、中でも血液学に関わる研究を好きになったのは、私自身が根っからの理系の人間で、血液学が理詰めで解決できる部分が大きかったからというのもあるのですが、やはり、辻本先生のもとで学べた経験が大きく影響していると思います。

## 研究の魅力を見直し、臨床との両立へ

—先生は大学院卒業後、博士研究員としてミネソタ大学に所属されていた経歴がありますが、そちらで先生が影響を受けた方もいらっしゃいますか。

一番に思い浮かぶのは、Jaime F. Modiano先生です。ミネソタ大学のラボの当時の研究責任者で、腫瘍生物学の分野ではかなり権威のある方です。この先生のもとで研究できたことが、私の中で大きな財産になっているのを感じます。Modiano先生は、「部下の失敗は全て上司の責任。業績は、自分だけでなくチームのサポートで獲得したもの」という考え方を貫いている方でした。例えば、渡米したばかりの頃の私は英語でのコミュニケーションが不得手で、チームでの仕事の中でちょっとした失敗も多かったのですが、Modiano先生から怒られたことは一度もなく、むしろ「きちんとサポートしてあげられなかった自分の責任だ」と言って私に謝られるほど。科学者としてはもちろん人としてもすごく尊敬できる方で、こんな人になりたいと憧れました。Modiano先生に出会ったことで研



究の面白さを再認識させてもらい、「大学での研究と臨床を両立できる職に就きたい」と考え始めました。その後、大学の教員になってみると、まず自分が教え子たちよりも進んでいないといけませんから、教育も研究のモチベーションになると感じていて。やはり、大学に所属している教員として、研究、臨床、教育の3つを常に最高水準でやっていかなければならないと考えています。

## 研究を前に進め、飼い主の想いに応える

—富安先生は今までに筆頭で13本、共著を含めれば全55本と非常に多数の論文を発表しておられます。これらのテーマ設定については、どのようにして考えておられるのですか？

臨床の現場に立っていますと、今の獣医療では治せない疾患だったり、原因が分からなかったり、費用の面で治せなかったり、色々なケースに出会います。そうした「分からない」「治らない」ということが、研究のスタートの動機であるべきだと考えています。これは、退官されるその日まで臨床現場に携わっておられた辻本先生の姿から学ばせていただいた部分かもしれません。

—近年、人医学領域における癌治療の進歩が著しいと聞きますが、獣医学領域ではいかがでしょうか。

人医学領域では分子標的薬や新しい免疫治療など様々な治療法の開発が進んでいますが、これらの導入は獣医学領域ではごく一部。保険制度が人間と異なることもあって、飼い主の負担は非常に高額になります。しかし最近では、これは私が二次診療施設である当院にいるからかもしれませんが、「既存の治療で治らないなら、何か他の治療法を施してほしい」と熱望される飼い主さんがとても増えているなどと思います。なのに、獣医師として何も打つ手がないと非常に申し訳ない気持ちになりますし、自分たちの、そして獣医学領域全体の研究の進みのあまりの遅さを痛感すると言いますか……。こうした現状を何とか打開して、飼い主さんの切

実な願いにお応えしたいというのは、研究の大きなモチベーションの一つにもなっています。

—研究で今、特に注力している内容は？

大雑把に説明しますと、抗がん薬や放射線治療などの既存の治療法が効かなくなった場合、それらの使用を諦めるのではなくて、どうすればもう一度、抗がん薬が効くようになるのかという研究です。そのほか、抗腫瘍効果を出す物質についても探っているところです。いずれもニッチな領域の研究ではありますが、そのあたりの立ち位置が私の好みに合っていると云いますか(笑)。最近では他の学問分野の先生からもお声がけいただくなどのご縁に恵まれ、共同研究なども進めているところです。

## 自由闊達な意見交換でチーム医療の実現へ

—東京大学の内科系診療科では昔から、活発な症例検討会を開催されているそうですね。

はい。担当医の考え方や最新の診療方法を知り、さらに一つの症例に対して多数の先生がさまざまな角度からの見方を話し合うことで、チーム医療に近い形が実現できると考えています。この検討会では年下の教員でも、「こうしたほうがよかったのでは?」と、かなり突っ込んだシビアな質問をしてくれますし、気づかされる部分もあつたりします。こうした自由闊達な気風は大野耕一先生をはじめ、先輩方が守り続けてくださった伝統で、非常にありがたいと思っています。

—最後に、後進の学生や一次診療の獣医師の皆さんに向けてのメッセージをお願いします。

研究室の学生にいつも話しているのは、「臨床の現場に必ず立ちなさい」ということです。今の時代は業績が求められるがちなので、「多くの時間を研究にあてたい」という学生が多いのですが、やはり、研究に向かうモチベーションはさきほどもお話しした通り、臨床の現場から生まれるものだと思っています。

また、一次診療の先生方に対しては、我々のような二次診療施設とより緊密な連携をとれるような取り組みができればよいと考えています。お互い果たすべき役割を尊重し合いながら、より密な関係性を築いていきたいと考えておりますので、今後もどうぞよろしくお願いいたします。